



三文文士会 2021 年明大祭号 目次

【詩・短歌】

「鉄の轍」南風こまち …… P.3

【通常作品】

「〈空白〉」狐狸野類 …… P.5

「ハンブルグステーキ」南風こまち …… P.8

「若い飲み方」小田たつえ …… P.11

「甘情」とうふ …… P.14

「偉大なる大学生活——森見登美彦『太陽の塔』を勝手に解説」

千尾陀世 …… P.17

「余白」水面 ……P.20

涙雨 帰らぬ日々に 花束を

通過列車に 花びらが散る

磐越の 寒風切り裂き 暖を繋げ

大地の怒りも 止められはせず

窓枠に 切符ひとひら カップ酒

汽笛一声 旅立ちの夜

雪の夜 迫る閃光 王子様

柱の陰で サンタは微笑む

生き急ぐ 乗客はみな 青ざめて

「駆け込み乗車はおやめください」

終電後 ホームに降り立つ 守護神

扉となり 壁となり

闇を抜け 陽の真下には 青々と

隣の席には 瀬戸の花嫁

凍てる山 連なる客車も 真白に

手を取り進め スワローエンゼル

南風 こまち

最果ての 北の鉄路に 汽車はなく

流され果てて ただ眠るのみ

路線図を 見上げる片手に サイコロを

赤い目が出て 行くぜ、東北

いざ行かん 神をも追い越す ハイライト

走れひかりのちようとつきゆう

旅の窓 読み進めては 移りゆく

ページはなくとも 旅のお供に

崩れゆく 時刻表にも 解は無く

血濡れの指は から回るばかり

人あふれ 電車が来ない 帰り道

諦め肴に のれんをくぐる

迫りくる 光に合わずは ファインダー

対向列車に 膝をつく

分岐点 別れる線路の その先に

何が待つのか いつか往く旅

帰り着く 故郷の駅は 変わりなく
待ち人微笑む 「おかえりなさい」

僕はもう、こんな動機で小説を書くのは心底御免だと思つた。

中学三年生の夏。陸上競技部の一員として、隣の市の競技場で催される地区大会へ行つたときのことだ。

自分の競技が早々に済んでしまつた僕は、屋根のある観客席一带に構えられた部の陣地へ戻つて、一人寂しく遅めの昼食を食べていた。他の座席には荷物ばかりが置かれていた。部員達は既に大半が食事を終えたらしく、恐らくは各々の競技やその準備に動んでいるのだ。わいわい雑談をする気分でもなかつたので都合がいい。僅かに残つた部員はいずれも、理由なくしゃべるような相手ではなかつた。

黙々ともぐもぐ。もくもく積乱雲。何を見ても眩しい陽気だ。眼下ではタータンのトラックとそれに囲われた芝生全体が燦つて、透明な煙をゆらゆら漂わせている。選手たちは風もなく走る。万象を尻目に食うプチマトが美味いぜ。

ともあれ、こうしてようやく落ち着いて腰を据えることができた。はず、の、僕の元には、もうすぐそこまで悪意が迫つていた。階段を下りるリズムカルな足音が単なる雑音でなくなつたのは、最後の一段がジャンプで飛び越えられたからだ。

……たんと。

「先輩、一人寂しく昼ごはんですね。予選の結果はどうだったんですか？」

「ずいぶんご挨拶も早々に、左に三つ隣の席に座つて

くる。悪たくみにびつたりのにやにや顔に覚えがあつた。「なに、僕の雄姿を見逃してしまつたというのか」

「ええ、そんなことはリザルトだけ見れば十分でしょう。残念でしたね。で、結果の感想もとい三年間の総括をどうぞ」

そう言つて、抜け抜けとランニングシューズを脱ぎだした。かきあげられたられた前髪でよく見えるおでここと整つた眉が、中学生にしては垢抜けた印象を抱かせる容姿。二年の後輩とあつて、さすがの僕も名前を知つていた。小野原うらら。この前も顧問の鬼頭先生に、色付きリップが云々と身だしなみを指導されていた。要はませたがきんちよなのでは？

残念とだけ言われて終わるのも癪で、とりあえずは慰めを求めることにした。

「泣いてます」

「(一)秋傷様ですね。もうじき引退だと言うのに」

どうやら慈悲を求めることはできないようだ。僕は弁当を右に除けると、足元から大きなリュックを引っ張り出してすぐ左の席においた。でも僕は怒りはしない。泣いてもいい。そんな理由は端からないのだった。

「ははあ、小野原さんの方こそ、一人で寂しくなつて戻つてきちゃつたわけなのカナ？」

「いえ、午前の部も終つたことだし、そろそろしょぼくれた人間の顔が見られる頃合いかなと」

にこやかに言う。

でも、負け惜しみを惜しまないのが僕だ。

「じゃあ生憎だったね。実は僕、そこまでしょげているわけでもないのだよ」

「嘘だあ」

「いやいや」

第一、結果に何の不满があるでもないのだ。三年間、特別頑張ったわけではないのだから、特別不思議な結果でもない。何を懸けた勝負でもない。ただ、関係者諸君に結果を報告する気まずさと、可能性の青天井が閉ざされたことが虚しいだけだ。

「だからまあ、ご期待にはそえられそうにないかと」

「思ったより情けない話でした」

パン、不意に銃声が鳴る。トラックを長距離選手が走り出したようだ。遠くから見ると人間はキン消しみたいで滑稽だけれど、僕は何の感慨も抱かない。

「満足そうに微笑みながら虚ろな目をされると、きしよいです」

何だろう。今なら如何なる罵倒も、僕にふさわしい気がしている。道理だ。罪に対する罰なのだ。ドストエフスキー。

「こんな文脈で名前を出される彼が不憫です」

確かに。僕は何の運命に翻弄されたわけでもない、自業自得なのだ。

小野さんは足をぶらぶらさせながら一呼吸おくと、より直接的な手段を用いることにしたようだ。

「それにしても、先輩は本当に馬鹿ですね。出場資格たるゼッケンを家に忘れてくるなんて」

……………

失格になった理由は、マネージャーとして大会の運営を手伝うかたわら知ったのだろう。

家に連絡しようにも替えを用意しようにも、間に合わないことはすぐに判断できた。スタッフに訊いて、ダメですと言われるだけでよかった。

「よもやまさか夢か現かと思つたよ。忘れ物には気を付ける、どうかこの教訓を部で永代語り継いでくれ」

「先輩の実名と共にですな」
やれやれ、格好がつかないぜ。

「はあ」

ため息を吐く。

なんだかなあ。なんだかなあ。

上手く言葉にならないくせに、月並みなのだ。胸を締め付ける感情が存在している。ただそれは、原稿用紙の空白を恨めしそうに睨むことしかできない出来損ない。

中途半端なくらいなら、いつそ消えてしまえばいいのに。

「はあ……ため息をつくとき幸せが逃げるって言説に対してはそれ因果関係を倒錯してただけじゃないですか派閥だよ……」

そんな様子を見かねてか、小野原さんは自分のエナメルバッグを物色すると、一本の一本満足バーを差し出した。

「ほらこれ、あげますから。から元氣出してください。馬鹿みたいに満足しちゃってください」

一応弁当食べるところなのに。補給したエネルギーの使い道なんて残されていないのに。どうしてこんなに嬉しいのだろう。僕はここにきて少し、泣きそうになっていた。

「あ、ありがとう……って、あれ？」

バーを受け取ったそのとき、気づく。バーを差し出してくれた左手、その手首に、黒い線が引かれている。黒い、赤黒い線。僕はそれが、かさぶただと思つた。

「その手首、けが、してるの？」

小野原さんはすぐに腕を引つ込めた。右手で左手首を押さえている。

「あらら、バレちゃいましたか」

微笑を絶やさなかった彼女の表情が崩れた。眉を顰め

気まずそうに、こちらを下から窺うように見つめる。

「え、じゃあそれリストカットつてやつ？」

そのとき僕が、一体どんな顔をしていたのかは定かではない。ただ、その傷がリストカットによって付けられたものであるという確信は既に終えていた。そしてその自ら自らの手首を傷つけるという言葉の意味などを即座に反芻する。

「引かないんですね……もうちよつと驚いてくれるかと思つたのに」

「わざとでしょ。初めて見たけど、意外と好奇心のほうに勝つたみたい。よく見せてくれない？」

小野原さんは恐る恐るというふうには左手を差し出した。白い腕に、記録みたいにその痕は刻まれていた。五本の褐色。そのうち一本がまだかさぶたのついた、僕がさつき見たもの。傷は浅く、治りかけているようでもあつた。

「ねえ、触ってみてもいい？」
こくりと、頭だけが動いた。

親指の腹で撫でると、目で見るとはつきりと凹凸がわかつた。柔らかくて、きつとカッターナイフを食い込ませるにはそれなりの度胸がいる。唇を噛んで息を鋭く漏らし続けて、それでようやくこの四センチの傷がはしるのだ。

「痛かった？」

「うん」

「だよね。すごく痛そうだったもん」

満足バーに噛り付く。チョコ味だ。

「二本、満足」

「最悪ですね。」

「あーい」

「暑いですねえ」

「いっそ雨でも降ればいいのに」

「そうですねえ」

それきり黙った。

大会は思い思いの結果と共に幕を閉じた。

それから僕は、流れるように部活を引退した。袖触れ合うも多少の縁、だったか？ 誰かのリスカ痕を触ったくらいでも多少はやっぱり多少に過ぎず、もう彼女を見かけることもなかった。

パソコンの画面に空白が広がる。僕は無性に腹が立つ。

空白は、僕の存在を否定するように広がる。知らん顔だ。

その顔を歪めてやりたいのだ。知らしめてやりたい。

それはあるいは、壁の落書きのように。

あるいは、石ころで車に付けた傷のように。

あるいは、彼女が自らの肉体を呪ったように。

あるいは、無垢な子どもを残虐に殺すように。

あるいは、もういっそ僕が消えてしまおうか？

でも、それらはいけないことだと思っから、みなさん小説を書きましよう。その次はきつと僕と一緒に、誰かのための小説を書きましよう。

南風 こまち

冷房のきいたオフィスに正午を知らせるチャイムが鳴った。既にパソコンの電源を落とし、今か今かと昼休みを待っていた私はチャイムが鳴り終わる頃にはエレベーターで勢いよく地上に向かい始めていた。

エントランスを抜け、歩道を品川駅の方に向かって歩く。街角のショウウィンドウをジャック・オー・ランタンが彩る季節になったのに、じりじりと日差しが強い。朝起きるのを渋って日焼け止めを塗らなかつた自分を恨む。太陽の光がキラキラとビルのガラスに乱反射する中、数分で品川駅の前に来た。

駅前の横断歩道を渡り、目当ての店が見えてくる。良かった、まだ店の外まで行列はできていない。給料日から日も浅い月初め、今日はちよつと奮発したランチだ。洋食屋『つばきグリル』。月一回のご褒美だ。

入口横の立て看板には『ミニビール無料サービス 17時〜』とある。しくじつた、夜に来れば良かった。でももう口は洋食の気分だ。私の足は止まることなく、店内へと誘われていった。

自動ドアをくぐると、ワイシャツに縦じまのエプロンを巻いた店員が「いらっしやいませ」と出迎える。頑張つて急ぎ足で来たけれど、既に一階の席はこつた返していた。宣言が解除され、遠ざかつていた日常が少しずつ戻ってきている。

二階に案内されると、まだ人はまばらだった。絶妙に日差しの入らない窓際の席に案内された。初老の店員からゴブレット型のグラスと小さめのピッチャーに入られた氷水を出される。

私はそのまま店員を呼び止める。テーブルに置かれていたメニューを開く前から頼むものは決まっていた。「ハンブルグステーキとパンをお願いします」

「はい、ハンブルグステーキにパンですね、かしこまりました」

側頭部に白髪を残した店員は愛想よく伝票に注文を書き込み、階段を下りて行った。

料理が来るまでの間、スマホを開いてみる。どうでもいい健康食品のダイレクトメール、最近興味を無くしつつあったアイドルグループの痴話騒動といったくだらない情報が目に飛び込んでくる。アホらしくなつてスマホをポケットにしまう。ぼんやりと窓の外を見ながら時間を潰そう。窓枠にも小さなジャック・オー・ランタンが笑っている。

昼間なのに、いや昼間だからだろうか、人通りや車通りは絶えることなく、奥の品川駅にはひっきりなしに電車が出入りするのが見える。長い宣言期間が終わつたせい……というより、感染者数が減つたせいだろう。人の出入りがやたら増えた。会社もテレワークから普通のオフィス業務に戻すことになったが、私は辞易した。毎朝着替えて化粧して満員電車の中で人間せんべいにされる日々が戻ってくるなんて。テレワークなら電波さえ届けば温泉宿からでも仕事できるのに、どうしてこうも不便な方向に逆戻りするんだろう。

さっきの店員さんが鍋敷きを持ってきてくれた。ナチュラルな色合いの木製の鍋敷きだけど、だいぶ使い込まれたみたいだ。度重なる高熱で表面が黒くこげている。

この上に熱々の鉄板に載せられた料理が来ると思うと待ちきれない。感染対策としてプラスチックの衝立とかをテーブルに設置しているような店なら鉄板が触れて衝立を溶かしてしまう心配をしないといけないかもしれないけれど、この店にそんな無粋なものはない。

オフィスに出るようになったら同僚に会えるけど、お

局とも顔を合わせることになる。そう思っただけならしながらオフィスに向いたら、同僚からお局が流行り病で倒れたと知らされた。いい気味だと思ふ反面、身近なケースで少しびびった。

「お待たせいたしました、ハンブルグステーキとパンでございます」

厚手のミトンを手にはめた店員が、湯気の立つ丸鉄板に載せられた料理を運んできた。鍋敷きの上に料理が載せられる。

鉄板の上には熱でパンパンに膨らんだアルミホイルの包み、そして皮付きジャガイモが丸々一つにクレソンが添えられている。

テーブルの上の籠の中からナイフとフォークを取り出し、プレセントの包みを開ける子どものようにわくわくしながら銀の包みに刃を入れる。アルミホイルはすんなりと割け、中から勢いよく湯気が立ち上る。そのまま割れ目を押し広げる。ビーフシチューの香りと共に、漏れ出たソースが鉄板に広がりじゅわあ、ばちばちと音を立てる。

アルミホイルの割れ目は大きな穴となり、中にはハンブルグステーキがでんと鎮座している。ハンバーグ、と言ってもいいのだがどこかそう言わせない特別感がある。ナイフとフォークをハンブルグステーキに差し込む。空気を含んで柔らかく形成したステーキは下手に切り込むとほろほろと身崩れする。端っこから切り離れたけど、やっぱり崩れてしまった。

ソースをたっぷりとつけて口に運ぶ。熱と共にビーフシチューの香りとコクが口いっぱい広がる。柔らかく組まれた肉の歯ざわり、しんなりと煮込まれた玉ねぎの食感、これこれ。このために今日を生きてきた。

優しい味わいに背中をそっと押されるようにして、私はまたナイフとフォークをハンブルグステーキに向かわせる。今後は大きく切り込み、頬張る。焼けるような熱さの肉汁が染み出す。飲み込むと胃の中が温まるのが分かる。

一度ここでナイフとフォークを置き、パンに手を伸ばす。カチカチのフランスパンだ。バリバリとちぎるとパンくずが皿だけでなくテーブルにも飛び散る。これがめんどくさくて家ではフランスパンを食べない。

バターナイフで付け合わせのバターをえぐり、パンに塗る。何の変哲もないパンであるはずなのに、焼けた小麦の深い香りに食欲がそそられる。

今度はクレソンに手を付ける。そのまま食べるとえぐみがきつそうだから、アルミホイルの包みの内側を拭くように緑色を走らせる。茶色が銀色と焦黒色に変わり、私はクレソンを口に運ぶ。意外に歯ごたえのある茎の食感と柔らかな葉の食感、鉄板に直に触れていないために生ぬるいような温度。きつとしたえぐみは無く、ソースと合わせていい箸休めになる。手にしているのは箸じゃないけれど。

またハンブルグステーキを切る。混ぜ物は無し、肉のみでガッツリと焼き上げたはずなのにこの柔らかさ、食べやすさ。私も過去に自宅でハンバーグを作ってみたことがあるけれど、つなぎの玉ねぎを買い忘れて仕方なくひき肉のみで作ったところガチガチに固いハンバーグになつてしまい、とてもじゃないけど食べられたものではなかった。

フォークで取り、また口に運ぶ。さすがに少しぬるくなってきたはいけるけれど、口の中で肉汁とビーフシチューの香りが爆ぜる。フォークとナイフから少し残った肉

汁がアルミホイルに滴り落ち、脂の丸い波紋が細かくつつき合う。

残り少なくなったハンブルグステーキを惜しむように残しておき、私は付け合わせのジャガイモソテーに手を伸ばす。肉そぼろの餡がかけられたそれは芯までホクホクと火通しされていて、ナイフを入れたそばからポロポロと崩れる。少しいら、だった私はお行儀が悪いと知りながらも思い切つてフォークを突き立て、丸々一個のジャガイモソテーを真つ二つにし、その片方にかぶりついた。

塩気の効いたそぼろ餡によつて、ジャガイモ本来の甘さとうまさが際立っている。ホクホクとした食感を口いっぱい楽しみなが、ちよつとずつ飲み込んでいく。口の中がほほ空になり、水を一杯。辛料理は好きだけど水分が口内から吸い取られるのが時々疎ましく思われる時もある。でもこの水は口直しだ、最後に残ったハンブルグステーキを迎え入れるための幕間だ。少し気取つたようなゴブレット型のグラスを空けると、小さくなった氷がからからと音を立てた。びっしりと結露に覆われたピッチャーから水を注ぐ。

最後の主役には残つたソースをたっぷりとまぶそうかと思つたけれど、ソースはぐに取つておこう。私の口には少し大きすぎるけれど、思い切つて頬張る。空腹が満たされつつあることや味に少し慣れてきたこともあつてさすがに最初に口に入れた時ほどの鮮烈さは失せている。でも、またこの店でのハンブルグステーキを食べようと思わせるには十分すぎる余韻をもたらしてくれる。

半分ほど残つたジャガイモソテーにまたフォークを突き刺す。さつき食べた時には程よく焦げ目がついた皮がべろりとむけて逃げてしまった。今度は逃がさない、皮

ごと口に運ぶ。

さつきまでのホクホク一辺倒の食感とはまるで違っ
粘り強くかみちぎられまいとする皮の柔らかくも突っ張
った食感が楽しい。焦げ目のところを噛むと少しだけカ
リカリとした歯ごたえがある。ジャガイモソテーにここ
まで様々な食感があるというのを久しぶりに思い起こさ
せられる。前に驚かされたのは、そうだ、前にこの店で
この料理を食べた時だ。次にこの店で食事をするときは
違うものを食べてみようと考えるのに、ついついいつも
このハンブルグステーキを頼んでしまう。

さて、残るはフランスパンだ。私はまた固いパンをち
ぎり、とりあえずはバターを塗る。瞬く間にフランスパ
ンの残りは減つていき、バターが先に尽きてしまった。
でも、これでいい。

最後はバターを塗らない。最後の一口に残しておいた
パンをアルミホイルの銀色の中に投下する。指で満遍な
く銀の底を拭い、やがて茶色は拭われなかつた細かい線
だけになった。アルミホイルの底には私が最初にナイフ
を入れた時にできた割れ目があり、そこから黒々とした
鉄板と泡状のまま焦げ付いたビーフシチューソースが顔
を覗かせていた。

パンの柔らかい白が残っていたビーフシチューソース
の深い茶色に染まる。やつぱりはこうじゃなくつちや。
ハンブルグステーキを頼むと、どうしても主役が肉にな
つてしまう。パンはソースだけを楽しむのに最後まで取
つておく、それが私の食べ方だ。

赤ワインやスパイスも使っていないような風味はあるのに
それでいてこの優しく包み込むような味わい。ずつとこ
の味だところりしすぎてているけれど、ハンブルグステ
ーキとパンの組み合わせなら色付けるのにちよほどの組

み合わせた。

最後にまた冷たい水で喉を潤し、完食。ごちそうさま
でした。

伝票を持って階下に降りる。いつの間にか行列ができ
ている。食べるのに夢中で気付かなかったけれど、私が
いたフロアも満席になっていたのかもしれない。レジに
向かうとバーコード決済ができるようになっていた。こ
の店も少しずつ変わってきている。次こそは私も違うメ
ニューを頼んでみようか？ でも結局はハンブルグステ
ーキを頼んでしまう、そんな気がする。

「ごちそうさまでした」

「ありがとうございます、またお越しく下さいませ」

初老の店員が頭を下げ、愛想よく送り出してくれた。

給料日直後だからこそそう痛くない金額を支払い、冷め
やらぬハンブルグステーキの熱を胃に感じながら外に出
る。帰りに品川駅のトイレで少し乱れた口紅を直してい
こうか、いやマスクをしていればばれやしなやか、そん
なことを考えながら私は店を後にする。午後の始業まで
はまだしばらく時間がある。

日差しの強さに思わず上を見上げる。『つばきグリル』
の二階の窓からは、小さなジャック・オー・ランタンが
笑いながら私を見下ろしていた。

面と向かつて初めて話したのは二年の春学期も末の頃だった。欠席が多かった彼女からだだった。

「ねえ」

「ああ、どうも」

「ノート見せてくれない？」

それ以上でもそれ以下でもない。ときたまこの文言を問われては、家に帰ってスキャンした自分のルーブリーフのデータを送る程度。

若干の変化を見せたのは三年になってからだだった。ツイッターを眺めると、新しいフォロワーに彼女が居た。ハンドルネームは方々で呼ばれてたあだ名だったので、気づくのにさほど時間はいらなかった。

——フォローありがとう

既読だけが付いて、一度は終いになった。

彼女は二十を超えてお酒好きのような発言が増えた。

新しく買った日本酒の四合瓶の写真や、肴と酒の写真を見ることが多くなった。

俺自身もある程度飲む性質だったから、対抗するわけじゃないけどツイートをあげるようにしていた。そんな折、たまたま俺の地元の酒を飲んでいることが分かり、リプ返した。

——その酒俺の地元のやつじゃん。美味しいよな

——そうそう。甘口で好き

——ツマミは？

——ない。単品で飲むのが良いかなって。

——多少は胃にもいれないと後でくるぞ

——大丈夫だって

翌日、二日酔いで授業を受けたらしなかった。

こうして酒の話が出来るやつはなかなかいなかった。

これが美味しい、とかこの酒にはこれがアテに欲しいと

か、こんなディテールのある話が出る人が正直欲しかった。いっそ、面と向かつて酒を飲もうかと思った。

「泉谷さん」

ある日の帰りがけに見かけたところを止めた。

「なに？」

「あ、その、今度ほかのやつも連れて酒飲み行かない？」

「いいのお？」

「うん」

「わかった。メンツ決まったら連絡ちょうだいね」

「わかった」

その後行きたいメンツも揃った。そのうちのひとりと話す機会があった。

「お前、泉谷さん誘ったらしいじゃん」

「まあ、最初に声かけたのがね」

「まさかのお目当ては彼女ですか？」

「は？」

「だってアイツこの学科じゃ群抜いて目鼻立ちいいしなあ」

「そういうわけじゃ」

「お持ち帰り考えてんのか？」

「ばか、なわけあるか」

「まあでも、泉谷さん相手いなさそうだしワンチャンあんじゃないの」

「そういうつもりは一切ない！」

「んだよもったいねえ」

ただ酒が飲めればいい。ちよつと愚痴でもお互い洩らして楽しく飲めれば良い。

全員の予定が空き、逆に授業の事を考えれば早いに越したことは無いとなつて飲みは九月の末に決まった。

駅前で集合した。彼女は白のワンピースに小さな鞆だけ持ってきた。全員が集まりやすい場所を考えて、彼女の最寄り駅が一番いい、となった。

一軒目。彼女も俺もトップスピードで飲み始めた。他が二、三杯でいい気分であるところを俺と彼女だけ飲み続けていた。七杯目で限度が少し近づいた感じがしてスピードを緩めた。彼女は六杯目だった。

「結構飲みんだね」

「こういう時にはね」

気づくと十一時半を廻っていた。他のメンツが終電の関係で帰り始めた。結局、三駅で帰れる俺と最寄りの彼女だけが残った。

「帰っちゃったね」

「まあ、仕方ないよな」

黙々と酒の飲み口に口をつける。

「……誘ってくれてありがとう」

「ううん。こんなに飲めるひとほとんど今いないからや」

「だね。女子じゃもつとしないよ。こういう場くらいいやないとここまで行かないし」

「気疲れするよね。他と合わせるよ」

「わかる」

結局飲みつづけた。八か九杯だったはず。彼女が七か八杯だった。ラストオーダーの声がかかった。

「どうする？」

「もつと遅くまでやってる店あるけど、行く？」

「……うん」

最後を飲み終え、お互い千鳥足に近いような感じで数分歩いた。電灯の暗い、そんな店だったことだけ覚えていた。テーブルに通され、対面で座った。

「ね」

「ん？」

「タバコ、いい？」

「え、ああ」

ピアニツシモのペヴェル。ピンクのパッケージが眩しかった。

「吸うんだ」

「まあ、仕事柄」

「……つていうと、接客とか？」

「まあね。誰にも言っていないけど」

「言えるはずないよな」

「初めて言った」

「そりやそうだよな。俺もいい？」

「吸うんだね」

「まあ少しだけ」

ピースライトを取り出す。一本啜えて火を探す。

「点けたげる」

「いいよ」

「気にしないで」

BICのライター。一吸いをくゆらせ、吐き出す。

「ありがとう」

「職業病なのかも」

「いいと思う。好感度があがると思うし」

「そうかな」

頼んだサワー二つが来た。

「あれ、カナエちゃんじゃないの？」

「……無沙汰です」

「お連れさんがいるとは珍しい」

「大学の同期です」

軽い会釈。

「いつもはあそこのカウンターなんだけどね。んで日本酒結構飲んで帰るんですよ」

指さす先のカウンターは、たしかに時々ツイートで見える背景だった。

「いいですね。こんな子が飲みに来てくれるなんて」

「ほんとですよ。お酒は飲むし話ほうまいし」

「店長さん……」

微笑む彼女

「んじや、ごゆっくり。閉店して少しくらい嘖いても大丈夫なんです」

「どうも」

周りを見やる。誰も客がいない。もう遅い時間だ。日付を越えたばかりだった。

「明日大丈夫なの？」

「え？」

「仕事。俺はとくに何してるわけでもないからいいけど」

「私も明日は空けてある」

「そっか」

「……あゝ」

「なに？」

「……あたし、学科の中で下半身ゆるいとか言われてない？」

突拍子も無い事を言われたものだ。

「は？」

「いやちよつとその、気になって」

「……別に何も言われてないけど。少なくとも俺の周り」

「は」

「そ」

「どうして急に」

この顛末はこうだ。少し前から同期の女子からはぶられていた気がしていた。なんとなくその理由を探っていると、自分が「そういうこと」をなりふり構わずしているらしいとの噂が立っていた。もちろん誤解だと言っただが、誰が言い始めたか分からない。二年の頃から休みがちだったのはそういう陰口に耐えられなかったからだという。自分がそういう職に就いてるからなのかもしれないが、それでも誤解でここまで来るとは思っていないかったらしい。

俺は閉口するしかなかった。なにせ職も含めて何も知らなかった。あいつが言っていたのもそういう影響だったのかもしれない。

「……事務室とかそういうところには言ったの？」

「二応。でも返答ないし」

「……俺だけじゃどうしようもないしな」

「あたし、それから逃げるようにしてお酒にすがってさ。飲み始めて好きなのは変わらないけど、逃げるための手段になってるっていうか」

「……そりゃそうなるわな」

「だから、久しぶりに何も考えなくて飲み続けてるんだよね、今日」

「……いいんじゃない？」

「え？」

「単に逃げるための手段になってるんじゃないかって、楽しく飲めてるって感覚。それが大事だと思うけどな」

「少しだけ、彼女の頬に酔いのせい以上に赤みが増した。」

「……もう少し、飲んでもいいかな」

「飲み過ぎはいけないよ」

「今日は良いの」

サワーの酸味が緩み、甘味が増した気がした。結局一時過ぎまで店にいた。さすがに出ようと云って支払いを済ませた。無論、帰る電車はとうに消えていた。

「タクシー取って帰るよ」

「うん」

「じゃ、気を付けて帰れよ」

「ありがと」

一台を見つけ、後部座席に向かう。

「ねえ！」

「ん？」

首に腕を回される。正面から、唇が触れた。

「ありがとね。また飲もう」

「……ああ」

後部座席に座り、住所を言う。ハイ了解です、でドアが閉まる。彼女は立ち尽くしていた。にんまりとして戻らんだ顔だった。少し手を振る。酔いのせいで彼女が返した振る手は大振りになっていた。

帰路の最中で酔いは冷めていった。火照りが消えるなか、浮いたような記憶は貼り付いて離れなかった。

△あとがき△

小田たつえです。ご無沙汰しております。今回の作品は自身では正直流れが微妙な感じがしていますが、いろんなことを詰め込んだ本作を楽しんでいただければ幸いです。

私が寄稿できる機会ももう数少なくなってます。中根もとうにか長編の人物たち最後まで記録しきるメドを立てたく、読者の方々におかれましては何卒もう少しお待ちくださいますようお願いしております。それでは。

二〇二二年一〇月八日

舌に人工的な甘さがまとわりつく。飲み込んでも飲み込んで口内に残り続けるそれを、田辺渚はあまり好んでいなかった。じゃあどうしてそれを買ったのかと言ったら、購買のパンコーナーで売れ残ってた姿が可哀想だったからだ。渚の情はよくわからないところで働く。

すぐそばから流れていた木管楽器の音色が止まる。直後に、楽器を置く音。それに釣られるように顔を上げると、パイプ椅子にもたれた音の主がこちらを伺っていた。

「なんで今食べてんの？」

「昼休みに食べきれなかったから」

「え？それだけなの？」

「友達と熱い会話を繰り広げてたの」

「ふうん」

少女はまるで興味が無さそうに、大きく伸びをした。ずり下がったシャツから、白い腕が露わになる。昔と比べて茶色が強くなった長い髪が、重力に従ってまっすぐに落ちた。そんな友人の姿をこれまた興味が無さそうに眺めながら、渚はクリームパンを咀嚼する。何だか気持ち悪くなってきた。

「リン、これ残り食べてくれない」

「無理。今練習中だし、また歯磨かなきゃになる」

「あ、そう」

一体何を期待してたの？ 心の中の、もう一人の自分が笑う声がする。握られたパンのビニール袋がくしゃりと音を立てた。

友人は「よし」と体勢を起こすと、再び楽器に口をあてた。細い指が、キーの上を滑らかにスキップする。その滞りない動きは、彼女の今までの努力を物語っていた。

甘情

とうふ

「どうして川上さんと、あんなに仲良いの？」

「……え」

渚はパンの袋を破るのを思わず止め、目の前で茶色いお弁当をつつく友人の顔をまじまじと見つめた。彼女は行儀悪く、プラスチックの箸に肉団子のタレを絡ませている。美味しそうだな、なんてひどく場違いなことを渚は思った。

「聞いている？」

「え、うん、凜のことでしょ？」

「川上さんのことというか、まあ、うん」

噂になってるよ、二人のこと。

その声は、注意しないと昼休みの喧騒に掻き消えてしまふほどか細いものだった。なんだか、めんどくさいな。過去の様々な出来事が思い出され、渚は無意識に眉根を寄せる。渚は重い話や感情的な相談事がとても苦手だった。元来、何事も深く考えずに行動するタイプである。誰かを能天気にも励ますことはできても、気持ちに寄り添って親身になることは向いていない。

湧き上がりそうになるため息を飲み込んで、購買で買ったクリームパンを机に放置する。そいつを腹に入れるのは、もう少し先になりそうだな。

「どうして、急にそんなこと聞くの？」

「気になったから」

箸が肉団子に刺さる。いとも容易く貫通したそれは、相変わらず安っぽい色にまみれていた。

「川上さんって特進クラスだし、体育も別に合同じゃないし、部活も違うでしょ。なのにどうしてかなって」

「塾が一緒なの。それで少し話すようになっただけ」

「でも、噂では、キスしてたって」

今度こそ渚はため息を吐いてしまった。目の前のうつむ

いた頭がびくり震え、こちらの表情を伺うようにおすずと上がる。その頃には渚はすっかり、人のよさそうな笑みを貼り付けていた。誰も拒まないのに、誰も近寄ることはできない。そんな笑顔。

「キスって、恋人同士でするものでしょ。私と凜はただの友達だから、そんなことしないって」

「そう、だよ」

怯えたような表情が一気に柔らくなる。事実を話しただけなのに、簡単に安心するんだな。渚は冷めた気持ちでそれを眺めた。例の肉団子はようやく彼女の口の中に運ばれる。渚はもう、それを美味しそうだとは思わなかった。

昼休みの出来事の流れるように話終えた渚は、鞆から取り出したミネラルウォーターを盛大にあおった。カスタードクリームの甘さが、ぬるい水と共に胃の底に落ちていく。

「やだ何その噂、面白いわね」

思いきり当事者であるはずの川上凜は、まるで他人の噂話を聞いているかのような反応をした。あまりにもこのころと笑うので、渚としては、彼女の膝の上にある何十万もする楽器が床に落ちてしまわないかと不安で仕方ないのだが。一人はらはらしていると、凜はようやく笑うのを止め、しかし顔いっぱい「面白い」という表情を浮かべながら手を叩く。

「してみる？ 実際に」

「何を？」

「キスを」

「馬鹿じゃないの」

「言うと思った」

そう言ってまたきやらきやらと笑い始めるので、渚はついに彼女の楽器を膝から取り上げた。銀色のキーがきらめくそれは凜が中学の頃に買ってもらったものらしい。何という楽器だったかは忘れた。

「なんでそんな噂流れたかな」

「あれじゃん、この前私の顔に虫付いたじゃん、それ取ってもらった時見られたんじゃない」

「それ、かあ」

一週間以上前のことだった気がする。珍しく二人でお昼休みを過ごしていた時、凜の目の近くに小さい虫がとまったのだ。擦ると危ないし、かと言って目に入られても面倒なので、渚がそれを取ってあげただけ。確かに必然的に距離は近くなったし、角度によってはそういうことをしているように見えないこともないかもしれない。それにしても、わざわざ噂になるようなことか、と渚は思うけれども。

「みんな暇人なの」

「女子校じゃないの。飢えてるんだよ、そういう話題に」

「それ凜だけじゃないの」

「そんなことないって、絶対」
そう言いながら、凜は渚の方に手を伸ばした。渚はなぜか一瞬目がこわばるのを感じたが、何事もなく素通りして自分の手にある楽器の方に向かう手に、弛緩する。

「…その楽器の名前、なんだっけ」

「オーボエ。三日前にも言った」

「なんか存在感薄くて」

「失礼過ぎない？ 殴るよ」

オーボエを鈍器のような持ち方で高く掲げる凜に、渚は

本気でストンプをかけた。こちらの心臓が悪い。凜は不満そうな顔を見ると、楽器の先端部分を引っこ抜いた。まさかそれを投げつけてくるのではと思ったが、どうやらただ片づけを始めただけらしい。

「もう吹かなくていいの？」

「今日は飽きたからいいや」

「そう」

「部活に所属してないときどうとき楽だね」

何てことないその言葉に、部活も違うでしょ、と言っていた昼間の友人を渚は思い出す。渚は元から帰宅部だが、凜は一年生の秋ころまでは吹奏楽部に所属していたらしい。詳しいことは知らないし知ろうとも思わないが、本人曰く「先輩とうぎやうぎやした」らしい。辞めるくらいだから、そんな可愛らしい言葉で片づけられるものではないだろう。しかし彼女は「オーボエは好き」と言っていて、部活を辞めた後でも、放課後は空き教室を見つけては気まぐれに一人演奏会を楽しんでいたようだ。渚が初めて凜と会話したまさにその日も、凜は一人、ホコリっぽい部屋のと真ん中で音を紡いでいた。

「好きだったよねえ、その子」

「え、何？」

ぼんやりと回想に浸っていた渚の耳に、予想外の言葉が放り込まれる。凜の視線は楽器に向いたままだった。

「聞いてなかったでしょ、人の話」

「…ごめん」

「やっぱさっき殴ればよかったかな」

冗談とも取れない声で呟きながら、凜は楽器いじりを続ける。黒い管の内側を、深い緑色の薄い布が行き来する様を、渚はただ眺めていた。

「もう一度言うけど。その昼飯一緒に食べてた女の子、

絶対渚のこと好きだったよ」

「…どうしてそうなる？」

「少なくとも、渚のことが気になってたから、わざわざ勇気出して確認しようとしたんじゃない」

「まさか。そこまで仲良いわけじゃないし」

「わかんないよ。フクザツな乙女心はさっ」

乙女心。自分とは無縁そうなのその言葉を口の中で転がす。今時、女性同士だからあり得ないとか無粋なこととは言わない。ただ、それほど仲が良くない人間から送られる一方的な好意にさらされるのは、あまり良い気分ではないと思つた。しかしそれも、「乙女心」なんていう甘くてロマンチックな言葉でコーティングされてしまえば、まるで全く無害なもののように感じてしまうから、不思議だ。

昼間の友人が頭によぎる。安心したようなあの表情は、一体どんな感情に起因するものだったのか。考えようとすればするほど、頭の中がどろどろに溶けていくような錯覚に陥つた。あのクリームパンと一緒だ、と渚は思つた。自分は、あの万人受けする甘さは頂けない。かと言って、誰にどんな感情を抱いて欲しいのかもわからない。溶けた脳みそでは、いつの間にか近づいていた友人にも気づくことができなかつた。

「そのパンどうするの」

ふいに投げかけられた問いに、渚は我に返る。自分の手元のビニール袋には、一口分残つたクリームパンが申し訳なきように居座つていた。買つてみたもののやつぱり苦手で、仕方なしに残してしまつた一かけら。

「捨てようかな」

吐き出した言葉は、思つていたよりも自嘲的だ。袋の口を縛ろうとした次の瞬間、白い手がそれを阻んだ。先ほどまで楽器を掴んでいた指が、渚の手の甲を包む。ふっ

くらとしたそれに、手だけでなく心臓までも掴まれたような気がして、渚は小さく息をのむ。自分のものではないシャンプーの甘い香りが満ちる。

「もったいないよ」

ささやかな奢めの言葉は、確かな質量と甘さを伴つて、

渚の心臓に深く沈み込んだ。

千尾 陀世

みなさん。
大学生活は楽しい時間で溢れかえっている、というのは、我々の寂しい心が生み出した哀しい幻想です。

陽のあたる坂道を自転車で駆け上るような、そんな女神さまも眩しさで目を細めるようなキラッキラの大学生を送れる人間は全体の一パーセントにも満たません。その他大勢の悲しき大学生達は、大学脇の側溝の泥を吸って生きているのです。それが現実です。残念でした。

かく言う僕も例外ではありません。

御茶ノ水とかいうお茶なのか水なのかよくわからない都心にそびえ立つ巨大なタワーキャンパスというお洒落心満載なビルに通うキャッキャウフフの年中トマト祭りテンションを維持した学生どもを横目に、僕は猿楽町とかいう猿なのか楽町なのかよくわからない、郊外に見捨てられた山奥の廃病院のような校舎に通い、年中ふんどし一丁で神輿をえっさほいさするような学生生活を送っていました。

今にして思えば、中々にファンキーな学生だったことでしょう。

お金も無ければ、友達もおらず、あるのは阿呆みたいに押し寄せてくる自由な時間だけです。

僕は高校時代に二兆冊の本を読みました、大学時代も暇さえあれば本を読んでいます。

世の中にはものすごく沢山の本が溢れかえっています。小説だけでも年間約一万三千冊発行されていて、本の総数となると七万冊にもなります。

その中にはとうぜん、素晴らしいものもあれば、自分にはちよつと合わなかったな、というものもあります。

でもこれは大抵の読書家、というか全人類に共通することだと思のですが、常日頃から、自分の人生に大きな

影響を与え、場合によっては世界の見方を大きく変えてくれるような、そんな素晴らしい小説を求めている。文句なしの感動。

でも僕が思うに、何の本を読むかっていうのはそんなに重要ではないのです。いつ、どの本と出会うか、が重要なんだと思います。

本には読むべきタイミングというのがある。間違いない。

例えば、子供のころ好きだった本を大人になって読んでみたら、その印象の違いにビックリした、という経験は、誰もが一度はしたことがあるのではないのでしょうか。もちろんその場合、変わったのは本ではなく自分の方です。

だからこそ、今出会っておくべき小説を見逃したくない。当時の僕にはそんな強迫観念があつたのかもしれない。高校時代に沢山の本を読んだ僕ですが、高校三年間では残念ながら「出会うっておくべき小説」に出会うことはなかったと言ってるわけではありません。

どれもこれも面白いものばかりです。ハツカネズミと人間、走れメロス、夏の葬列、八つ墓村、犬神家の一族、獄門島、悪魔の手喰、三つ首塔、病院坂の首括りの家、本陣殺人事件。

ただ残念ながら会うのが早すぎたのか遅すぎたのか、その中に人生の出会いと呼べるものはありませんでした。そもそもそんな出会いが本当に存在するのか。

そんな疑問を持ったまま僕は大学生になったわけですが、誰しも羨むおっぱっぱいな大学生に。

僕はこのまま全てのことに対して「そんなの関係ねえ」

を貫き通して人生という長い長い下り坂を勢いよく駆け落ちていくのではないか。

そんな恐ろしい想像が頭に浮かんで消え、えもいわれぬ焦燥感が背中にこびりつき始めた大学二年生の九月ついに僕は出会うべき出会いに出会ったのです。

森見登美彦——『太陽の塔』です。

いやあ、長い長い前置きでしたね。

この時点で読者は半分以下になっただけでしよう。でもここまで辿りついたそのあなた。

おめでとうございませう。あなたは偉大なる大学生活の貴重な貴重な五分間を、冗長で鬱屈とした救いようのない駄文を読むという生産性のせの字もない果てしなく無駄な行為に浪費してしまっただけです。



太陽の塔。

一九七〇年、大阪府で開催された日本万国博覧会——通称、大阪万博——のシンボルとして岡本太郎が製作したへんちくりんなミニメントです。

そんな建築物がタイトルにつけられたこの小説。

後に山本周五郎賞や日本SF大賞を受賞し、平成を代表する作家へと成りあがった僕が勝手に思っている、森見登美彦さんのデビュー作です。

森見さんはこの小説で日本ファンタジーノベル大賞を受賞しています。

タイトルが太陽の塔でジャンルはファンタジー。

これだけ聞くと、どんな奇想天外なおったまげファンタジーが始まるのだろうと胸がドキドキして文芸部になつてしまいうさですが、太陽の塔が宇宙に向かって打ち上ったり、宇宙人と交信するための電波塔になったりす

ることはありません。

ざっくりと言ってしまうえば、四畳半でモゾモゾと暮らしている腐敗しきった京大生が、初めての失恋からどうにか立ち直ろうと奮闘する、ただそれだけの小説です。なーんだ、よくある青春小説か。

と思った人はもう駄目です。心がねじ曲がっています。さようなら。頑張ってください。

この小説、そんな一筋縄ではできていない。なにせ「反復横跳びは素早く物陰に隠れるのに役立つ」とかいう主人公が、かつての恋人「水尾さん」を「研究」と称して、せつせとつけまわす所から始まるのです。普通の青春小説なわけがない。

いやいや、待って待って。マテ茶。

その「研究」というのは昨今話題になっている「ストーカー犯罪」というやつではないのかい？

貴方がそう思われるのも無理はない。僕も思いました。

でもその辺はちゃんと主人公から説明があります。

「私にとって彼女は断じて恋の対象などではなく、私の人生の中で固有の地位を占めた一つの謎と言ったことかできた。その謎に興味を持つことは、知的人間として当然である。したがって、この研究は昨今よく話題になる「ストーカー犯罪」とは根本的に異なるものであったということについて、あらかじめ読者の注意を喚起しておきたい」

だそうです。よかつたよかつた。

こわっ。

このセリフだけでも、なんとなく主人公の性格とか人となりというかが、見えてくると思います。

休学中の大学五回生。大言壮語 壮語大言 文士的な

語り口調で、うだうだうだうだと何やらうだうだ言っておりすなあって感じ。

これだけでも中々に面白い。

いやお前何言ってる？ つてツツコミながら読むことができる。このシステムは今まであるようになかったような気がします。

さらには鋼の剛毛を生やした大男、高敷、夢を失った男、飾磨、法界悟気の権化、井戸。

そういった腐った大学生の塊みたいな男たちが、自ら京大四天王と名乗り、狭い四畳半で熱い鍋を食ったりんだりして、男臭と男汁を撒き散らしながらきつたねえ部屋で朝を迎えるようなことをするわけです。

もう面白い。

僕の大学生活も中々のものでしたけど、この人たちは勝てないなと思っただけ。

そんなこんなで、夜になると叡山電車を自由奔放に乗り回す「水尾さん」を追いかけたり、「遠藤」とかいうけ好かない人間とゴキブリキューブ（ゴキブリ数十匹をまるく固めたもの）をアレゼントし合ったりしなかったりしているうちにクリスマスがやってきて四条河原でえいじゃないかええじゃないかと騒いでたら良い感じに物語は終わります。

こうして書いてみると中々に壮絶な小説ですね。

なにやっつてんの。と思わずにはいられない、奇妙で愉快な出来事のオンパレードです。

イケてない大学生がイケてないことを自白し続ける自伝的小説。言ってしまうえばそれだけなんですけどね。

でも。

不思議なことに読み切ってみると、この小説に対して透明で純粹で、儂げな何かを感じてしまう。

それはきつと主人公が大言壮語でありながらも、繊細な心の持ち主であることがほんのりと伝わってくるからでしょう。

せつないなあ。

腐りきった大学生が鬱屈とした気分です。男汁満載の生活をしていると、年を重ねるごとに焦燥感はどうすることもできなくなり、心の底で渦巻くものはどんどんと増えていく。

もうこうなつたら憎きクリスマス夜の「ええじゃないか」と騒ぐほかない。

ええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないかええじゃないか

ええじゃないか一色に染まつた京都の町で、群衆にもみくちゃにされた主人公が叫びます。

ええわけがない。ええわけがあるものか。と。

最初に言いましたけど、大学生活というのは、現在地を永遠にも繰り返すようなもやもやとした毎日です。自分という人間はどこまでいっても所詮自分なんだと思わない日はない。それが現実です。

もやもやもやもや。

でもよく目を凝らしてみてください。

そんなもやもやの中でわずかに、ほんのわずかにキラキラめいて見えたものがあるませんか。

それがきつとこの小説で言う「太陽の塔」なのです。

この小説を読んでいくにつれて、あなたの頭の中には、あなたなりの「太陽の塔」が浮かび上がってくるはずですよ。そう。日曜日の風が日曜日にしか吹かないように。

まあ自分でも何言ってるか分かりませんが。

さて。僕は森見登美彦さんのような卓越した文章力を持ち合わせていませんし、朝の市場のような豊富な語彙力も持っていません。なのでこの小説の魅力を語りつくすことは到底無理だということにさつき気がつきました。

そもそも最初にも言った通り、本ていうのは「いつ出会うか」が大事なのです。だから僕の感動をいくら人に伝えたところで、その感動を相手と共有できるわけがない。ブローディガンの「アメリカの鱒釣り」を名作と言う人もいれば、鱒の糞以下だと言う人もいる。その文学のレベルニクスのパラドックスはきつとそういう理屈で成り立っているのです。

ただ少なくとも、当時の僕が読んだ「太陽の塔」はこの世のどこにも存在していない。あのときの感動は、あのときの僕にしか得ることができなかった。これは間違いない。

だから、これから読む人にとつてこの本が「出会うべき出会い」なるかはわかりません。

でも。

もし出会うべき出会いになるとすれば、それはきつと「大学生の時に読んだ」、太陽の塔のほすです。

たとえそれが出会うべき出会いにならなかつたとしても、こんな冗長な駄文を読んでいよりはよっぽど有意義な時間を過ごせます。

主人公の懨然とした態度にツツコミを入れ、周囲の人間と繰り広げられる呆れるほどしようもない事件に大笑いし、最後にはほんのりとした切なさを味わってください。

明日の元氣くらいはもらえます。

そして太陽の塔を読んだ暁には、

「え、あなた、まだ『太陽の塔』読んでないの？ 大学

生なの！？ おやまあ！ お話にならないなあ！」
と友達をいちめてあげてください。

笑いながら教授の禿頭にビールをかけ続けていた僕の大学生活も、今にして思えばそんなに悪くなかつたなあと感じられるのは、きつとこの小説のおかげなのです。

太陽の塔

そんな小説です。

※ この文章には多少の誇張表現が含まれています。

薄墨色のベルトコンベアーの上に四角い封筒が等間隔に並べられて流れてくる。そのベルトコンベアーもまた等間隔に配置され、それぞれのラインに青色の服を着た作業員がこれまた等間隔に立っている。彼らの仕事は流れてくる封筒のフラップを内側に折りこむことだ。

まず目の間に運ばれてきた封筒を取り上げる。そして口を折ってまたベルトコンベアーに戻す。その繰り返すのである。何も難しいことはない。それだけの作業だ。

ビービービービー

静かな工場の中にブザー音が鳴り響く。無機質な音。

一人だけ水色の作業着を着た男は面倒くさそうな顔をしてエラーが発生したラインを確認する。

水面

F・7

「またか」

画面に表示された記号を見て吐き捨てるようにそう言うのと、エラーが検出されたラインへと向かう。その間にも他のラインは規則正しく封筒を運び、作業員は封筒を折り、折られた封筒は仕切りの向こうへ吸い込まれていく。停止したベルトコンベアーの傍で痩せた男がぼんやりと立ち尽くしている。情緒のない青色のつなぎは四把だけ、液体を扱わない作業をしていてどうやってつけたのか分からないような染みが点々と付いている。ズボンの裾は長すぎるのを折っているが、それが戻ってきて靴を隠している。

「今度はなんだ」

水色の服の工場長らしき人物が彼のラインの出口の方へ

歩いてくる。仕切りの手前で止まっている白い封筒を取り上げると、それはフラップが折られていなかった。その封筒を見ると再び工場長は大きな溜息をついた。

「なぜこんなことが起きるの？」

「……」

男は答えられない。答えがないわけではなく、答えたところで意味がないからだ。男はこの封筒が誰のどんな手紙を包むのに使われるかを想像していた。

その封筒に入るのは、遠くの家族に宛てた手紙か、しばらく会っていない旧友に出す手紙か、離れて暮らす恋人たちがやりとりする手紙か。パスデーカードを入れるかもしれないし、手紙ではなくちよつとした小物、例えば数枚の写真だとか、を入れて渡すのに使うのかもしれない。その封筒は手から手へと直接渡されるのかもしれないし、長い長い航海を経験するのもかもしれない。その封筒を受け取った人は、それを宝箱に入れるかもしれないし、涙で濡らすかもしれないし、破り捨ててごみ箱に入れてしまうかもしれない。

そんなことを考えるだけで彼の思考は海を越えた異国にでも隣の人間の頭の中にでも飛んでいける。

「おい、聞いているのか」

男はふつと我に返る。彼の仕事は頭の中で旅をするのではなく、ここにじっと立ってひたすらに封筒の口を折ることなのだ。正直に理由を説明したところでどうなるというのだろうか。

「すみません。集中していませんでした」

先週も先々週も同じミスをして、同じ理由を述べる男に工場長はカチンと来たようで、怒鳴りつけてやろうかと

いう顔をしたが、しばらく男を睨みつけて立ち去る。この工場ではブザー音以外で一定の大きさ以上の音が出る。と更に上の管理センターへ通知されるのだ。

工場長がその場を立ち去る後も男は終了時刻まで必死に作業を続けた。集中しようと思えば思うほど思考は他所へ散らばったが、それをかき集めるようにして何とかミスなく作業を終えた。

次の日、彼は早すぎるほど朝早くに目が覚めた。昨日は目覚ましを忘れ、遅刻しそうだったのに。余裕を持って家を出る。昨日と同じ道、昨日と同じ道を歩いている。男は突然その事実には耐えられなくなった。

「違う」

そう呟くと男は右折するべき角をまっすぐ進んだ。この時間にはここを歩いているのはたいい男と同じ工場の作業員だ。灰色の建物へ向かう人達の中から一人が突然抜け出したが、周りの人間は特に気にする様子もない。彼の足取りは群れからはぐれた羊ほど弱弱しくなかったからだろう。

いつもと違う道を歩く。いつもと違う景色が見える。男はその事実にも理由もなく満足した。結局工場に到着するのは出勤時刻ぎりぎりになってしまった。

*

退勤時刻になり一斉にベルトコンベアが停止する。すると、工場の中央に取り付けられたスピーカーが喋りだす。

「F・7の担当者は至急管理事務室に来てください」
同じ音声二度、三度と繰り返される。ついにここを解

雇されるのではないかと男は不安になりすぐに事務室へと向かう。

しかし、実際ここでは何をしても解雇されることはないのだ。ここで起きるミスは何に対してもどんな影響も与えない。どんな功績をあげても同様である。ここで作製される口の折られた封筒は、折られた口の封筒を開く工場へと送られる。そしてプレス機を使って折り目のない綺麗な封筒にされるのである。その真つ新な封筒がまたこの工場へ運ばれ、作業員たちはフラップを折るという仕組みだ。もちろん二つの工場で働く彼らはそのことを知らない。管理者の男も知らないし、管理センターの人間も知らないだろう。

「君には健康検査に行ってもらおう」

水色の上着が唐突にそう切り出す。

「何、君が何かしたというわけではないからそう緊張することは無い。実は他の工場で事故があつた。この工場では有害な物質が発生していないか確かめるための標本調査のようなものだ。ランダムで君が選ばれただけのことだ」

そういつて男は黄色の封筒を手渡される。それ以上のことは何も聞かされなかった。男は不審に思ったがここで何を言つても仕方がない。どうせ工場長も何も知らないからだ。「分かりました」と一言言つて封筒を受け取る。工場長は何も言葉を発さないがこちらを見ている。どうすればいいのか男は分からなかった。

「何ずつと立つてるんだ。もう用事は終わったから早く帰るなさい」

そう言われて慌てて事務室を後にする。荷物を入れたロッカーへ行くと、バッグの中に用心深く封筒を入れた。退勤時間の後一人だけ工場に残っていた男は普段と違

うがらんとした帰り道を楽しんでた。同じ道はずなのにいつもと違って見えるのが面白かったのだ。

すると向かい側から談笑しながら歩く三人の集団がやってくる。一人は犬を連れていて、顔を見合わせて笑っている。男の方は見ていない。

彼はまだ自分が毎日作っている封筒のことを考えていた。その封筒たちを使う人々の声が聞こえる。歓声する声、憤怒の声、すすり泣き。しかしそれは全て彼の声で再現されたものだった。彼は彼一人で劇を演じているのだ。その様子を想像してみてもほしい。色々な音がする。男の頭の中はいつも騒々しい。

うーっ わんっ

犬が突然男に向かつて吠えた。そしてそのことに男は気づかない。男の思考は浮遊し、飛行し、旅行しているからだ。男は無心で歩き続ける。

今度は男が突然「うわっ」といつて顔を手で覆った。その声に今度は三人の集団が驚いた。

今まで気にならなかった夕日が突然目に入って、そのビビッドな緑色が彼の目を貫くように照らした。コンクリートの道路は赤紫色に光だし、木々はオレンジ色に染まっている。それらのコントラストが彼の網膜を痛めつける。彼の見る世界はいつも疲れるほど鮮やかである。

*

家に着くと彼はまず上着を脱ぎ、机の前に腰掛けた。読みかけの本と汚れが固まった皿が置いてある。本に手を伸ばすとはつと封筒のことを思い出した。

先ほど渡されたばかりなのに危うく忘れるところだった、と慌てて封筒を開き、中身を見る。検査の日時、それが行われる施設の住所と地図だけが書かれた簡素な文書だ。しかも検査の日付は明日。やけに急な話だと男は思ったが、命令ということなので仕方がない。

「はあ……」

溜息を一つ。集合日時を見るにいつもより早く起床しなければならぬし、終了時刻も分からないのでもしかすると丸一日時間を取られるのかもしれない。そう思うと憂鬱だった。

考え込んでいた男がおもむろに腰を上げる。絵具とパレットを持って、イーゼルに立てかけられたキャンバスの前に座りなおす。彼の唯一の趣味は絵を描くことだった。彼の見たままの世界を。

今日も見た景色をそのまま描く。オレンジ色の木々が囲う赤紫の道路にグリーンの夕日が落下していく。目が痛くなるような激しい色使い。

彼はまた描いた絵を偽名で賞に応募していた。そしてその絵は軒並み最優秀賞や優秀賞をかつさらっていくのだ。しかし授賞式には表れないし、偽名なので彼が作者だということは誰も知らない。彼だけが知っていることである。男にとってはそれが唯一の生きがいであった。

「よし」

無心に絵筆を動かし続け、ふと時計を見るともうすでに夜中の三時を回っていた。明日は早く起きなければならぬのに、うっかり夜遅くまで絵を描いてしまった。慌てて布団に潜り込み、目を閉じる。うるさい声はまだ鳴り響いたままで、眠りにつくには時間がかかる。耳を塞いでも聞こえる声は彼が半ば意識を手放すように眠るまで囁き続けるのである。

*

ジリジリというアラームの音で慌てて男は飛び起きる。まずい、集合時刻に遅れてしまう。バッグを手を取り、今日は必要のないのに作業着を詰め込む。玄関に手をかけたところで黄色い封筒を忘れたことに気づき、慌てて引き返す。雑に握りしめられた封筒がぐしゃりと音を立てたと同時に、扉はぱたんと閉まった。

相変わらず彼の頭の中では自分と全く同じ声色が鳴り響く。叫びだすときもあれば、囁き続ける時もある。

誰かに話しかけられている時や工場で全体に向けたアナウンスが流れているとき、工場長が何かの説明をしている時などもこの声は鳴っている。そのせいで人の話を聞き逃したり、そもそも世界で鳴っている音に集中できないことがよくある。作業中も男の脳内では声が男を想像の世界に送り、まさに心ここにあらずといった状態だ。先日一つ封筒を折り忘れて注意された時も、男の頭の中では声がしていた。その声が大きければ大きいほど、現実世界の出来事はもやがかかったように聞き取れなく見えなくなる。声はいつも男の生活を邪魔する。

それでも何とか検査の場所までたどり着いた。「健康検査センター」。分かりやすい名前だ。真っ白な建物。

正面の自動ドアの前に立つと静かに開いて、男の中に入るように促す。真っ白い清潔な施設の中には長い真っ白なカウンターが奥の方まで続いている。ここからどこに行けばよいのだろうかとうと辺りを見回していると、カウンターの中から薄桃色の制服を着た女性がこちらへ歩いてきた。

「今日は何の御用でしょうか？」

とにこやかに尋ねる。男は慌てて検査を伝え、封筒の中身を見せる。すると既に上がっている口角を更にぐいと持ち上げて「ではこちらにどうぞ」と男をエレベーターへ誘導した。

ボタンを押してしばらく待たされる。男はこの施設に來るのは初めてで、きよろきよると施設内を観察している。そしてまた男の頭の中で物語が語られ始める。

この健康センターは健康センターという名で不必要な人間を消す施設なのではないだろうか。工場長はランダムで私が選ばれたと言っていたが、先週同じようなミスを何度も繰り返したことがどうも無関係とは思えない。きつとミスの種類や回数に一定の基準が設けられていて、それを越えてしまった人間を「検査」という名目でここへ送り、殺してしまうのだ。こう考えると全てつじつまが合う。封筒を見せた途端他の人間が使っていない奥まった場所にあるエレベーターへ案内されたこと、職員がやけに笑顔で接してくることに、これらもその事実と真実味を持たせているのではないか！やはりこれはどう考えても不必要な私を消すためのいん……

「うるさいっ」

次第にボリュームを上げる物騒な声に思わず男は声を荒げた。脳内の声はこんな馬鹿げた妄想を繰り返すこともある。SF小説でもあるまいしと思うが、あまりにうるさい声について反応してしまった。

職員は一瞬びくりとしたが、すぐに平然とした態度に戻る。男はそれを見てどうにもいたたまれない気持ちになった。母親が自分のために買ってくれた万年筆を壊した時や、自分の絵を褒めてくれていた人に似顔絵をブレ

ゼントしたら泣かせてしまった時の気分とよく似ていた。

ピンポン

エレベーターが到着し。実際はわずかな時間だろうが男にとっては永久に感じる瞬間が終わった。こ

「こちらに乗って七階までお進みください」

職員はエレベーターには乗らない。男が言われた通り七階のボタンと「閉」ボタンを押すと、扉は閉じられ、深々とお辞儀をする職員が深々とお辞儀をした状態のまま見えなくなった。

また同じピンポンという音がして七階に到着する。エレベーターを降りた所に立札がある。

「検査の方、右へお進みください」

指示通り右へ行く。しばらくまっすぐ歩くと今度は突き当りの壁に張り紙がしてある。

「ハサミなどの金属製品を持っている方はこちらにお預けください。預けましたら、左にお進みください」

特に持っていないなかったのでそのまま左へ。すると突き当りに一つの白い扉があり、そこにまた張り紙がしてある。

「検査にご協力いただき誠にありがとうございます。検査はこの部屋で行われます。お荷物があの方は下のかごにお預けください」

ようやく検査室に到着か、と薄汚れたブルーの作業着が入ったバッグから封筒を取り出し、部屋のドアを開ける。

「協力ありがとうございます」

そこには白衣を着た女性が一人座っており、傍には先ほど男を誘導した職員と同じ薄桃色の制服を着た男性がいた。

「では早速検査を始めていきたいと思いますので、こちらに移動してください」

男性職員が指差す方へ行くと、検査器具らしきものがずらりと並べられていた。

まず唾液と髪の毛一本を採取される。唾液を試験管に入ったピンク色の液体に慎重に混ぜる。髪の毛は顕微鏡らしき器具でじっくりと観察した後、黄緑色の液体に浸してしばらく待つ。更にその次、白い液体を飲んだ後に体中をスキャンするような機械に入れられる。その後男には到底目的が分からない検査をいくつか受け、三十分ほど時間が経ったところで、終了を告げられた。

「はい。では検査結果は後日職場の方に郵送いたしますので、今日はもう帰っていただいて大丈夫ですよ」

「はあ」

さすがに先ほどの作り話のような頭の声を信じていたわけではないが、こんなに早く終わると思っていなかったのだ。男は拍子抜けしてのそのと検査台から立ち上がる。かかとの潰れた靴をそのまま履き、荷物を取りに検査室を後にしようとする。

「あ、最後に一つだけ」

白衣の女性が何か思い出したように声をあげる。

「これは検査とは全く関係ないのですが、最近職場で悩んでいることか仕事で困っていることかありますか？」

男はきょとんとした顔で女性を見る。

「いや、この検査の中にはすぐに結果が見られるものもあるのですが、それを見る限りあなた相当お疲れのようだから」

女性は心配そうな顔でそう付け加える。

「声が」

男は自分が答えたことに驚く。頭の中の声のこと、眼を

穿つような景色のこと、それは誰にも言ったことがなかったからだ。

「ただ今日はどうしても言ってしまうような、全て吐き出してしまいたいような衝動に駆られる。」

「お悩み事あれば何でもおっしゃってください。私はそういう内容も専門ですので」

彼女の声はやたら優しく響く。それに誘われるように男の口からはぼつぼつと言葉がこぼれだした。

「あの、頭の中で、声が。声が、聞こえるんです」

「声、と言いますとあなたの声ですか？ それとも誰か他の人の声？」

「私の声です。でも話している内容は私が思っていることじゃない。誰かが私の声を使ってるんです」

「なるほど」

女性は考え込むようにした後、後ろにいた男性職員に何か小声で指示を出した。

「続けてください。それがお仕事中にどう影響してきますか？」

真剣な目でこちらを見る。

「ええと、その、頭の中の声がうるさくて、現実の声が聞こえないときが多くて。工場で、あ、私は封筒の口を折る工場で働いているんですが、その工場長はかんじが悪くて、いや、あ違うんです、そこで働いていて」

「落ち着いて。ゆっくりでいいですよ」

「ええ、その工場で指示とかが出されるんですが、頭の中の声が邪魔で上手く聞き取れないんです」

「その声のせいで現実世界にはもやがかかったように感じるということですか？」

「そうなんです！ まさにその通りだ！」

女性的的確な表現に思わず男は興奮して立ち上がった。

「あつ、すみません。でもとにかくあなたの言う通りなんです」

「あなたはその霏を消してしまいたいですか？」

「えっ」

男はすつと声によつてかかる霏に悩まされていたが、不思議とそれを消したいかどうかと問われた時の答えは用意されていなかった。ただ邪魔だと思つていたが、不思議と消したいとは思つていなかったのだ。

「ええと、それは完全に消してしまふということですか？」

「はい、この薬を飲めばその症状は完全に治まります」
そういうと職員が持つてきたカプセルのシートを男に見せる。レモン色のような淡い色をしている。

「……」

男は即答することができなかった。

「この薬さえ飲めばあなたを苦しめている声は聞こえなくなり、霏は消え、仕事で単純なミスを繰り返すこともなくなるんですよ」

女性は力強くそう語りかける。男は答えられない。

「では一週間だけ試しに飲んでみてそれから決めるといふのはどうでしょう？」

痺れを切らしたように提案してくる。しばらく悩んだ後、男はそれなら、と薬を受け取った。

*

検査時間自体はわずか数十分だったのに、最後のやりとりのせいで男はどつと疲れていた。なぜ男が薬をすぐに受け取らなかったのか、あんなに悩まされている声を消せるのに。それは男自身もよく分からなかった。

意を決して薬を飲んでみることに決意した男は、台所

に行きグラスに水を汲む。一日一回だけ朝に飲むようにと言われていたが効果が気になるので帰ってきてすぐに飲んでしまった。

するとどうだろう、なんだか目がぼつちりと開いて、背筋が伸びるような感覚がする。夜になつてもどうも眠りたくないし、何か動き回つていたいと彼は思った。普段絶対思わないようなことだ。

散らかつている下手を勢いよく片づけ始める。皿を機械に入れ、床に乱雑に並べられた洋服を拾い上げ、バラバラの場所に置かれた本や書類を一か所に集める。その後も彼はネズミのようにちよこまかと動き回り、清潔な巣を作り上げた。

夜が明け、工場へ向かう時間になつても彼の眼は冴え切つていた。作業着をきちんと畳み、バッグの中へ。余裕を持つて家を出ると、いつもと同じ時間に、いつもと同じ道を通つて工場へ向かう。理由は分からないがそれが苦痛ではなく、むしろ喜びすら感じていた。工場での作業も難なくこなし、工場長の呼びかけにもはきはきと応じる。その返事に相手は思わず面食らつた顔をしていた。

彼は次の日の朝も、その次の日の朝、その次の次の日の朝もカプセルを飲んだ。そうすれば全てが上手いくからだ。仕事でなんのミスもしないし、規則正しい生活を粛々と送ることができる。

薬を飲み始めた一週間後、男はある事実気づく。一週間一度も絵を描いていないのだ。彼は物心ついた時から絵を描く事だけは欠かきなかつた。それなのに一週間も絵のことを思い出ししなかつた。それは男にとつてとつともなく大きなものを失つたような感覚だつた。すると、またあの声だ。

絵なんか描かなくなつていいじゃないか。お前は適切な生活を送れているんだから。そもそもお前の絵なんて最初から誰も興味ないものだつたんだよ。

「うるさいうるさいうるさいうるさい！」

男の怒声に反応して工場のブザーが響き渡る。他のライソンの作業員が何事かという顔で彼の方を見て、慌てた様子の工場長が事務室を飛び出してくる。彼は途端に工場の外へと駆けだした。

「はーっはーっはーっ」

息を荒げながら自宅へと走る。追いかけてくる工場長など無視だ。

駆け込むように自室に入ると、彼は迷わず絵筆を手に取りキャンパスの前に立つた。

なぜだ。何も描けない。

何も描きたいものが、描けるものが、描くべきものがない。何一つとして思いつかない。

男の頭はその考えでいっぱいになった。乱暴にカーテンを開き、外の景色を見る。男は絶句した。なんてつまらない景色なんだ。突き刺すような色彩も悪夢を見せるような異形も何もない。なんなんだこの世界は。

ドンドン
ドンドン

どうやら工場長が追い付いたようだ。扉を激しくたたき音は、もはやただの音で、頭の中で反響して彼を苦しめることもなかつた。彼の頭の中は驚くほど静まり返つていて、彼の見る世界は驚くほど穏やかだつた。

その時彼は自分が分に絵を描かせていたのかを初めて

知った。そして自分が何をしたのかも。

ドンドンドン

扉を叩く音がどんどん遠ざかっているように感じる。そんなはずはないのに。ああ、ああ。静かすぎる。穏やかすぎる。なんだこの場所は。もといた世界に戻してくれ。

あの声が、霧が。あれがないと私は何も描けない

ドアが勢いよく開き、工場長は男が青い作業着の上で倒れているのを見つけた。テーブルの上にパレットナイフは、置かれていない。

彼のいる世界は驚くほど平凡で退屈だった。

彼のいた世界は驚くほど平凡で退屈だった。

彼のいない世界も驚くほど平凡で退屈だった。

明治大学

三文文士会

2021 年明大祭号

- 発行：明治大学三文文士会
東京都杉並区 1-9-1
明治大学和泉校舎
- 発行者：明治大学三文文士会
- 表紙：石橋冬華
- 編集：吉津大河

